

各地で「体験談&説明会」開催! 予約不要 入場無料 入退場自由



●青年海外協力隊 対象年齢20～39歳

青森市 4/21(土) 14:00～16:00 青森県水産ビル6F 研修室 (JR青森駅徒歩5分)

「コンピュータ職種のシゴト」分科会
PCインストラクターで活動したOB体験談やフリートーキング、応募相談を行います。PC関連の職種に興味がある方、電気・電子関係の技術経験をお持ちの方、どうぞお気軽にご参加ください。

盛岡市 4/14(土) 14:00～16:00 アイーナ5F 会議室501 (JR盛岡駅西口徒歩4分)

「青少年活動のシゴト」分科会
文科系出身希望者も多い、青少年活動。その活動範囲は、非常に幅広く配属先も多岐に渡っています。具体的な活動内容や求められる知識・経験はどのようなものか、などについて体験談やフリートーキング、応募相談を行います。他の職種をお考えの方にも参考になる話が盛りだくさんですので、どうぞお気軽にご参加ください。

仙台市 4/8(日) 14:00～16:00 仙台第一生命タワービル11F C会議室 (仙台市営地下鉄「勾当台公園駅」下車) (南3出口 徒歩1分)

4/22(日) 14:00～16:00

「JICAボランティアパネル展」
東北出身のJICAボランティアの活動風景を紹介するパネル展示を行います。世界各地で活躍したJICAボランティアの姿を是非ご覧ください。

秋田市 4/7(土) 14:00～16:00 アルヴェ1F 音楽交流室D (JR秋田駅徒歩3分)

山形市 4/15(日) 14:00～16:00 霞城セントラル2F 研修室 (JR山形駅徒歩3分)

「村落開発普及員のシゴト」分科会
日本ではあまり馴染みのない職種ですが、協力隊では最多の応募者を集めている「村落開発普及員」。具体的な活動内容の紹介やフリートーキング、応募相談を行います。文科系出身の方にも活動できる職種です。他の職種をお考えの方にも参考になる話が盛りだくさんですので、お気軽にご参加ください。

●シニア海外ボランティア 対象年齢40～69歳

青森市 4/21(土) 10:30～12:30 青森県水産ビル6F 研修室 (JR青森駅徒歩5分)

盛岡市 4/14(土) 10:30～12:30 アイーナ5F 会議室501 (JR盛岡駅西口徒歩4分)

仙台市 4/8(日) 10:30～12:30 仙台第一生命タワービル11F C会議室 (仙台市営地下鉄「勾当台公園駅」下車) (南3出口 徒歩1分)

4/22(日) 10:30～12:30

「JICAボランティアパネル展」
東北出身のJICAボランティアの活動風景を紹介するパネル展示を行います。世界各地で活躍したJICAボランティアの姿を是非ご覧ください。

秋田市 4/7(土) 10:30～12:30 アルヴェ1F 音楽交流室D (JR秋田駅徒歩3分)

山形市 4/15(日) 10:30～12:30 霞城セントラル2F 研修室 (JR山形駅徒歩3分)

詳しくは、JICA東北 ボランティア募集担当までお問い合わせください。
TEL: 022-223-4772 ④ jicathic-jv@jica.go.jp

ジャイカプラザニュースとうほく 2012年3月号

JICAプラザ

国際協力のための情報スペース



3月の展示 教師海外研修 (インドネシア・バンドアチェ) OPEN

JICAでは毎年、小学校・中学校・高等学校の先生方を対象に、開発途上国における国際協力の現場を視察し、その経験・素材などを生かした開発教育実践のための研修を行っています。今年度は、東日本大震災で大きな被害を受けた東北各地から集まった22名の先生方が、インドネシア・アチェ州のバンドアチェを訪れました。

2004年に起きたスマトラ島沖地震では、インドネシアだけで16万人以上が犠牲となり、50万人が家を失いました。今回の研修で訪れたバンドアチェは震源に最も近く、特に津波で大きな被害を受けたインドネシア最大の被災地です。地震発生から7年という月日が経過しましたが、復興の歩を進めてきたバンドアチェの現在の姿を、研修に参加された先生方はどのように受け止めたのでしょうか?

2、3月のJICAプラザでは、この教師海外研修で見てきたバンドアチェの様子をパネル展示してご紹介したいと思います。東日本大震災からの復興を目指す私たちにとっても、「バンドアチェの今」はさまざまな課題を克服するヒントにもなるのではないのでしょうか? ぜひご覧になってみて下さい。



スマトラ島沖地震・津波から7年。現地で行われた追悼式典。



津波避難場所への誘導標識 photo: 藤原真吾 (JICA)

JICA東北 JICAプラザ併設

④ 開館時間 9:30～17:30
月曜～金曜
宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービル15F
(地下鉄勾当台公園下車徒歩1分)
TEL 022-223-5151
④ jicathic-pr@jica.go.jp



WEB SITE http://www.jica.go.jp/tohoku/

東北6県 JICAデスク イベント情報の詳細などお気軽にご連絡下さい。

- 青森デスク 青森市水産ビル5F TEL 017-735-2249
- 岩手デスク いわて県民情報交流センター(アイーナ)5F TEL 019-654-8911
- 秋田デスク 秋田総合生活文化会館(アトリオン)1F TEL 018-893-5499
- 山形デスク 山形市霞城セントラル2F TEL 023-646-6267
- 宮城デスク 宮城県仙台合同庁舎7F TEL 022-275-5540
- 福島デスク 福島県庁舟町分館2F TEL 024-524-1315



JICA東北はISO14001 環境マネジメントシステム認証機関です。この印刷物は省資源・省エネルギーに配慮したFSC 認証紙と環境にやさしい植物性インクを使用しています。

2012年3月



今月の特集 Topic in Focus

※休刊のお知らせ: 今号の発行をもちまして、本紙を休刊させていただきます。今後はWeb版をJICA東北ホームページにて不定期公開致します。

ひまわり 向夢花の咲く国 インドネシア

バンドアチェで 夢に向かう子どもたち

表紙写真: コミュニティ・ビルでの地元住民や学生との交流・意見交換の様子 photo: 昆野光行 (気仙沼市立豊新小学校)

原田 恵理 先生 仙台市立中田中学校



奨学金をもらう孤児

アチェの子どもの笑顔、きらきらとした眼差しが本当に印象的でした。辛い震災を乗り越えて笑顔で生活する子どもたちの姿に触れ、たくさんの元気をもらいました。このような笑顔あふれる未来が待っていることを、いま目の前にいる子どもたちに伝えていきたいと思います。同様に大震災を経験したインドネシアと日本、これからもお互いに学び合っていければ強く感じました。

白土 典子 先生 岩手県立盛岡商業高校



高台移転地区にて

中央の黒いTシャツを着ている女の方(ラストリさん)は、大津波のあった日、家族と離れてメダンで働いていたという。彼女は津波で家族・親戚、家……全てを失った。今は中国からの支援で建てられた高台にある家で、同じく家族を失った人たちとともに「家族」として暮らしている。「みんながいるから、今、とても楽しいです。」水不足に悩まされ、近くに病院もない暮らし……彼女の笑顔は明るく力強かった。

武田 麻紀子 先生 岩手県立宮古商業高校



建物の上へ乗上げた船、周りには住宅地が広がった。

「悲壮感がないかゆえの穏やかな結束力」というのがインドネシアの印象であった。豊かな自然に包まれ、食べものに困ることもなく寒さで死ぬこともないからこそ、この世の全てを神の恩恵としてありのまま受け入れる姿勢が前提として存在する社会。この姿勢は日本と似ているようで、死への悲壮感がない分、異なった様相を映し出す。それは震災の受け止め方にも現われていて、過酷な悲劇でさえ神の行いとして受け入れる人々の前向きなあり方に大いに驚かされた。

佐藤 慶一 先生 仙台市立若切小学校



孤児院でけん玉をプレゼント！見事のせることができました。

本研修では、式典やコミュニティビルなど、訪問した先々で東日本大震災に対する心配の声をかけてくださったインドネシアの方々とも出会いました。学校では日本を身近に思い、励まし、メッセージや歌を贈ってくれた子供たちがいました。「国際社会との豊かな連帯感をもつことができる児童を育成する」ことをねらいとして本研修に参加し、私自身、国と国とのつながりの温かさに気づき、今後、子供たちと与えていくことを数多く得ることができた素晴らしい機会となりました。

平岡 静香 先生 仙台白百合学園



震災後、親戚が住む南三陸町を訪れ、ただただ言葉が失ってしまいました。町の方々が抱く不安は、痛いほど伝わってきて、一体、私には何ができるのだろうかと悩んでしまいました。あれから9か月、アチェで出会った、あのお母さんが吹のように話してくれました。「今日までの7年間、生きたいという気持ちからがんばることができたよ！」今、悲しみに打ちひしがれている方々が、希望の光を見出せるように、微力ながら、生徒と共に、エールを送り続けたいと思います！



ひまわり 向夢花の咲く国インドネシア

バンダアチェで夢に向かう子どもたち

●Text: 松浦 英樹 石巻市立蓮波中学校

※JICA's World 3月号「世界とつながる教育」のコーナーでも、JICA東北の教師海外研修について掲載されます。詳細は <http://www.jica.go.jp/publication/index.html>

『心の友』を合唱し、歓迎してくれたランジャバット第11中学校の子どもたちとともに

2004年インドネシア・スマトラ島沖地震と聞くと「津波」そして「被災地」という悲しい状況を思い浮かべます。その悲劇から最大の被災地となってしまったアチェ州の州都バンダアチェ市を訪問する機会をいただきました。(JICA東北教師海外研修 in インドネシア2011年12月24日～30日)

私たちは、ランジャバット第11中学校をはじめ、市内の小・中・高校、イスラム学校、孤児院などを訪問しました。そこでの子どもたちから受けた印象で驚いたことは、三つあります。一つ目は、いつも「こんにちは」と笑顔であいさつをすることです。二つ目は、インドネシアの民族舞踊で歓迎され、日本の歌を日本語で披露するなど表現力豊かであるということでした。それは、現在、東日本大震災で被災した日本の将来を見ているようでした。三つ目は、災害

対策モデル推進校になっているバンダアチェ第1高校の生徒たちの志の高さでした。その生徒たちは、震災発生当時、「津波の水が首の高さまで来た。モスクに避難しようとしたが、様々な漂流物が多く、避難できなかった。」と振り返っている。その震災を経験した生徒たちに将来の夢を聞いたところ「警察官になりたい。アチェの人はがんばっているという姿を見せたい。」「医師になるためにインドネシア大学に進学したい。」「工科大学に進学して、アチェのための開発をしたい。」という生徒たちのアチェの人々の役に立ちたいという純粋な気持ちに心を打たれました。

表題の「向夢花(ひまわり)の咲く国インドネシア」という意味は、夢に向かう花、つまり、信じたものにひたむきに向かうアチェの子どもたちです。その夢が復興への道標となっていると信じています。

どうほく
@WORLD

スマトラ島沖地震から石巻の復興を考える

石巻日日新聞社
報道部記者(石巻市)

熊谷 利勝 さん



津波7周年式典会場であつた子どもたち。笑顔が印象的でした。

昨年12月末、東北地方メディア派遣制度を利用してインドネシア教師海外派遣に同行し、津波から7年が経ったアチェ州バンダアチェの現在を取材しました。

石巻日日新聞は東日本大震災の被災地である石巻市、東松島市、女川町で夕刊を発行しています。各市町では昨年未までに復興計画が策定され、住民の理解を得て津波浸水地域の集団移転や減災のまちづくりに取り組むことが共通の課題になっています。バンダアチェでも移転によりニュータウンが形成さ

れていましたが、移転せずに再建された住宅も少なくありませんでした。文化の違いはあれ同じ場所に住みたい住民の思いは石巻地方と同じで、復興の過程も課題も多く共通の点で共通。こうした事例がありながら、いかに海外に無関心だったかを痛感しました。

教師派遣とあって現地でも多くの子どもと出会い、その笑顔が目につききました。笑顔が未来につながるのが復興のまちづくりであり、被災地にある新聞社としてその一端を担いたいと思っています。